

北海道農業見聞記—スーダン人と一緒に北海道農業について勉強してきました—

9月中旬 JICA スーダン国カッサラ州基本行政サービス向上による復興支援プロジェクトのカウンターパート(CP)5名の本邦研修に随行し、北海道にでかけた。今年の北海道は例年になく暑い夏だったというが、羽田からの便で新千歳空港に降り立つとすでに心地よい秋の風が吹いていた。1週間あまりの滞在期間中、朝晩は冷え込みを感じるほどで、暑い国からのお客さんが風邪をひかないか気がかりであった。また、大雨をもたらした台風のとおりであり、札幌周辺や帯広に被害がでているとニュースで聞いていたが、べつだんの支障もなく、全員風邪もひかずに予定どおりの研修日程を消化した。道東ではちょうどジャガイモの収穫時期にあたり大型機械が盛んに動いていた。

今回の研修はスーダン現地での JICA プロジェクトの内容にそったかたちで見学プログラムがしぼられており、畑作物や野菜類を中心に見聞してまわった。しかし、北海道の農業は多種多様で水田稲作から果樹、畑作、畜産までさまざまな農業が営まれている。また大都市近郊の園芸作物から道東の大規模畑作まではばひろい営



帯広大正でのダイコン収穫機械上での選別作業



帯広のナガイモ栽培農家見学

農形態がみられる。そうしたなか、北海道の研修初日にまず道庁を訪問し、農業政策や計画立案について行政としての俯瞰的な話を聞かせてもらうことができたことはたいへんありがたい勉強になった。

日本の食料自給率がカロリーベースで 40%前後とも試算されるなか、北海道のそれは約 200%。帯広では 1,100%超であり、日本の食料基地として北海道農業の特異性が際だっている。道の中心施策のひとつとしては、グリーン農業が標榜されており、農業者への減農薬・減肥料の作付け指導がおこなわれていた。他方、有機農業はあまり活発にはおこなわれていないようであった。J-GAP(Good Agriculture Practice)に向けた取り組みはまだようやく始まったばかりで、どちらかと言えば、輸出より、輸入される農産物に対抗する意味での GAP 取得が強調されている節もあった。しかしながら、将来を見据え台湾や上海などに向けて積極的に道の農産物や加工品の輸出をはかる民間サイドの先行的な取り組みもあり、興味ぶかい動きとして注目したい。

道東では 40 代の元気な農業者に出会うことができた。しっかりと後継者の息子さんが二人おられて、大規模専作の畑作農業を経営しておられた。過疎に苦しむ本土の農山村とは別世界ともうつる。しかし、北海道といえどもその全体からすれば高齢化の寄る年波には抗しようもなく、日本農業のかかえる根本問題は共通なのであろう。石炭産業が衰退したのち、観光業と農業に活力を見出していこうとする北海道は、南スーダン分離後、石油依存から脱却し農業を再活性化させようとするスーダンとも重なる。とまれ、スーダン人の研修員と一緒に見学してまわった身としては、日本農業の負の側面ではなく、元気に工夫しながら頑張っている農業関係者の姿を見ることができてよかったとおもっている。

(2011年11月9日古賀)



ギャラリー「農窓」にて;札幌市にある生産者と消費者・加工業者をつなぐ民間の交流窓口